

もつと知りたい

ふるさと

30

花栽培の新技术

「西村鉄砲第一号」と聞いて何のことかわかる人は、ごく限られた方だろう。実を言う

と、これは、二十年にわたる努力で気品と美しさを備えて評判になったユリの花のことである。昭和二十六年、花の部では、日本の品種登録第一号という輝かしい記録を持つ。この花の生みの親が、埴生の桜堂で生まれた西村進さんという方である。

もつと詳しく知りたいと思いい、西村邸を訪れることにした。長男である一幸さんに昔話を交えてお話を伺うことができた。その話の中で、なる程と思ったのは、進さんの父上も進さんも花が好きだったことだ。好きなだけでは生業とすることはできないが、好きであることが元にあつてこ



咲きそろう「西村鉄砲ユリ」

そ苦難を乗り越える原動力になつたに違いない。

資料によれば、進さんは明治三十九年生まれで、埴科農蚕学校（現屋代南高）を出て家業の養蚕を手伝っていたが、体も強くないから好きな花づくりをしようと千葉高等園芸（現千葉大）へ。東京の多摩川近くの「温室村」で実地勉強した後、昭和三年、桜堂へ帰り、切り花づくりを始めたという。当時は、花づくりといつてもあまりやる人はなく、奇妙な目で見られたらしい。でも西村さんの努力があつて、十数年経つと次第に地域へも広まり、東京向けの切り花産地の先駆けとなつたという。

昭和三年在来の鉄砲ユリによく似た「高砂ユリ」が台湾から輸入されて人気を呼ぶ。実生から九カ月、しかもユリのない秋に咲くという鉄砲ユリにない長所を持つうえ、色も白。しかし進さんは花に斑のあるのが不満で、数千本咲かせた中から純白に近い物だけを選び、次の年育てる方法

で、一〇年かかって純白の高砂ユリをつくり出す。しかし香りがなく、病気に弱く、葉が長すぎる等、見劣りする。そこで高砂ユリに青軸鉄砲ユリをかけ、できた物に更に……

という具合。だが、交配といつても一年に一回しかできない。栽培技術もユリの生態もわからないから試行錯誤の繰り返し。一サヤずつ種子を蒔いては記録札を付ける。これを数千本やる。失敗続きのため、他の切り花の利益もユリにどんどんつぎ込む。種蒔きは十一月に温床へ。五月に定植。今のように電気温床などないから、夜は温度調整が大変。雨が降れば、コモをかける。暖かい昼間は、それをはずす。「子ども心にも辛い仕事でしたよ」とは、一幸さんの話。

また、「終戦後、何とかよい花ができるようになると、東京の朝の市場に出荷するため、夕方、できるだけ新鮮な花をコモに包み、屋代駅へ自転車の荷台に積んで何度も運ぶ父の姿は、今も忘れられない」

と言う。

西村邸でびつくりするのは、庭先に立つ「西村進氏頌徳碑」である。土台から六メートル以上ありそう。当時の業界紙によれば、「地元埴科郡を中心に一般の寄附を募り竣工」とあり、その業績は「西村鉄砲を初めカーネーション『乙女の笑』』『黄色の波』『瑞星』等の作出に成功。また、県花卉組合長等の役職も多数歴任された。」とある。

話をお聞きしたり、資料を読みながら進さんの功績の一番大きい点は、「地元の花づくりの発展に尽力したこと」ではないだろうかと感じた。

文責 青木 聡

参考資料

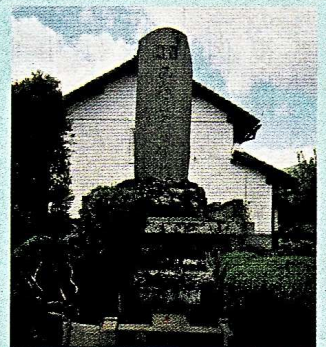
『信州の人と産業』

昭和四十五年（信毎）

『明日を築いた人々⑩』

（宇津木元）昭和五十七年

（信教出版）等



西村進氏頌徳碑